報告

前原町の古墳発掘（第二信）

―原田大六氏と会って――

会員　市野瀬　仁

前原町の古墳については、福岡市在住の佐脇貫一氏に、「佐伯史談」一月号をかりてご連絡しました。佐伯史談会では今年秋十一月に「北九州の古代文化を巡る」行事計画がまとまっています。前原町では、十一月は第二次の発掘が始まる時期でもありますので、とりわけ収穫が多いのではないでしょうか。この計画については、言い出した私にも責任がありますので、春休みを利用して、三月三十日第一次発掘現場を再度訪れてまいりました。

今回は、その報告をいたします。

私は以前お世話になった旅館の主人鬼木不二男氏をまず訪問して、発掘結果の大略を聞いて後、案内地図「糸島全図」を便りに歩いて行くことにしました。

前回の帰りぎわに行った「糸高郷土史展示場」に陳列されていた、志登支石墓群出土品の発掘現場「志登ドルメンの見学に先ず行って、三雲地方に足を延ばしました。「志登ドルメン」の現場は「糸高郷土史展示場」から約一・五キロの道のりで、田圃の真只中にあり、十数から十五数の強風のためか、説明板は吹き倒されていましたが、田圃の畔に腰を下して記録したのがこの内容です。

国指定　史跡　志登支石墓群　S二九・三・二〇　糸島郡前原町大字志登

弥生時代前期から中期に及ぶ甕棺墓を含む墓地遺跡である。この遺跡は、糸島半島の南に広がる平地の殆ど中央部の標高六メートルほどの水田面との比高約一メートルの微高地に位置する。昭和二十八年文化財保護委員会が発掘調査を行ない、支石墓一〇基を確認し、このうち四基と甕棺八基を発掘した。支石墓は径一・五メートル、厚さ五〇センチメートル程どの平石上石数個の支石でささえる形式のもので、下部構造は土横墓、支石をかねた巨石による長方形の石がこいなどがある。上石には玄武岩及び花崗岩を用い、その原石の最も近い距離にあるものは、西方寺より四キロメートルの可也山である。副葬品と思われるものは六号支石墓の石がこいの中から、打製鏃六個、八号支石墓から磨製石鏃四個が発見された。この磨製石鏃は朝鮮から多く発見され、支石墓の構造と共に、この地が密接な関係にあったことをあらわしている。地形は基盤層中に東西北の方向に傾斜する粘土層があり、この中に甕棺支石墓の基部が埋蔵されていた。甕棺は合が多く小形のものが多い。粘土層の上に後世の堆積土層があり、奈良朝末期以降の土師器、須恵器等を埋蔵していた。

前原町教育委員会

この支石墓群の全貌は次のように散在していて、ここ独自の数々の出土品が発掘されたことは、古代「伊都国」の殷盛を示すものとされています。

ここは怡土と志摩をはさんだ川が海に土砂を堆積してその上に新田を作った場所で、少くとも一万年近くの時

間を経たものと考えられます。

ドルメンの一つ一つの横にナンバーが記された杭があり、庭石のように草むらの土中にくいこんでいる。これらを手にさぐり見入っていると、古代人と連結した自分自身という一個の人間が、今ここに立っているのだという実感が湧いてきて、不思議の縁を感じました。

西風はますます激しく、十数メートルをこえ、墓地の木の葉を吹き散らしている。背をまげ田圃道を通りすぎて、やっと舗装道路に出ました。

目的地細石神社近くに着いた時は、かなりの空腹を覚える頃でした。

この前あった「福岡県教育庁文化課　井原・三雲遺跡調査事務所」の看板も取りはずされ、地元の主婦連が田圃を清掃していたり、男達が縄を張り杭を打って発掘したであろうと想像していた所は、とり立てて何も変っていないのが不思議に思えました。

細石神社の境内にある大樹の下を流れている小溝に、一人の主婦が何やら洗っていました。

「奥さん、遺跡を発掘したのはどこですか。」と聞くと、「そこの私の家の畠の近くですよ。それにあの方向でも掘ったそうです。」と指さして下さる。

「そうですか。私は去年発掘が始まった日に来たものですが、あすこでは村の人々が大勢田圃を清掃して、杭を打っていましたのに――。何も出なかったのですか。」

「ああ、あれは水道工事でしょう。　私がご案内しましょう。」

やがて主婦のいう「私の家の近くの畠」に案内されてみますと、十坪ほどの野菜畠らしい所で、発掘の後ということが分るように、きれいに地ならしをしていました。なあんだ、といった言葉しか出ないのです。ところがその一角に、次のような説明板が建っているのを見て、大へん重要な場所であることがわかったのです。

三雲南小路及井原鑓溝遺跡

三雲南小路遺跡

文政年間の発見、合口甕棺の内外に前漢鏡三十五面、銅剣、銅矛、銅戈計四本、玻璃製璧、勾玉などが副葬されていた。紀元前一世紀（弥生文化中期）の墳墓である。（現在前漢鏡一面、有柄、銅剣一本が重要文化財の指定を受け、福岡市聖福寺に所蔵されている。）

井原鑓溝遺跡

天明年間の発見。この場所より南方百米の地点にあった。甕棺で内に朱を詰め、漢中期の鏡二十一面、鉄製の剣、日本最大の巴形銅器を副葬していた、一世紀の墳墓である。

前原町教育委員会

私が道端に坐りこんで記録していると、二台の車が停った。見学者である。一人の男が私の頭の上で、発掘状況を微に入り細にわたって語りつづけるのです。あとで聞くと説明者は、この付近の学校の教師とのことでした。

教師の話によると、原田大六氏が今回の発掘にも、江戸時代黒田藩の学者青柳信の記録に基づいた三種の神器の発見地として、やはりここだという判断と、執念を持ったものようです。

主婦の「あすこ」といった場所にも行ってみましたが、

振った後を元に復して、土が細く砕かれ乾燥している田で、なにも変ったところはありません。

私は、今回の発掘の目的が何んであったか、もう一度再確認したく存じました。それは『耶馬台国に先だって、紀元前一世紀から二世紀にかけて繁栄したことが魏氏倭人伝にもあり、しかも五代続いたこの国の王墓が、平原三雲、井原だけは確認されている。それ故まだ解って居ない王墓を本格的に探そうというわけなのです。』（西日本新聞）

しかしさきの教師の説明なり、主婦や鬼木氏の説明でもどうも満足がいかないまま、帰途につかざるを得なかったのです。これだけでは佐伯史談会の方々が、わざわざ訪問するには十分ではない。もっとお土産を持って帰らねばならないと思いながら旅館に帰ったのです。

夕食後、

「鬼木さん、私は原田大六氏に是非お会いして佐伯に帰りたいのですが、自宅を教えて下さいませんか。」

「それはわけのないことですが、お会いできるかはむづかしいですよ。実はこの小さな前原駅には、日本各地から歴史学者や歴史愛好者や、新聞記者等がよく降りるのですよ。その多くの方々が大六氏に面会を求めるのですが、お会いできた人は珍しいのです。先日も千葉県から見えた方が、大六氏の宅まで行ってお会いしたが、氏は家の柱を拭き拭き上にもあげず門前払いをしたのを、案内した私が塀の外からみていて、気の毒でたまりませんでした。とにかく、私の名前など出さずに当ってみたらどうですか。

夜八時すぎ、薄暗い湖畔にそった細道に、一軒のバーがありました。どうしても家が分らないので困りめいた末尋ねると、そこの横道を右に行ったらすぐではないかしらと女は答えました。鬼木氏から収蔵庫のある家と聞いていたので、樹々の垣根をくぐりぬけて門札をみると、「原田大六」「面会謝絶」という文字が、ぼんやりと見えました。まさか病気ではないのだろうと自問しながらしばらく躊躇しました。

灯の見える裏庭に踏み入って、

「今晩は。大分県から来たものですが、先生はご在宅ですか。」　しばらくして

「はいー」とドアをじっと開けて、私の顔をみている男が、まぎれもない原田大六先生なのです。すると、炊事場らしい所から、

「どうぞお上り下さい」と女の声がします。ご夫妻は今食事がすんだところらしい。先生から、ソファーにかけることをすすめられて、寝をおろした瞬間、私は新聞記者が大物に会うた気持は、こんなものではなかろうかと思いました。

処女の如く世間知らずの私ではあるが、一学究者としての自負は心に秘めて、別に臆することなく面会の目的をきり出しました。先生は奥さんが出した密柑を、私にすすめることもせず、五つ六つご自身食べながら、下を向いて私の話を聞いて下さいました。

私はまず先生の頭ぼうに接したかったが、とくに目と手を見たかったのです。奥さんが、

「今日のテレビに出たのを見ましたか。」

「いや、汽車に乗っていた時間ですから見ませんでした。」

しばらく沈黙がつづいたのち、

「私と面接する一時間にいくらかかっていると思いますか。あなたは知っていますか。私は今二千万円の契約金付きで本を書いているのですよ。一日に原稿用紙何枚書くと思いますか。四百字詰め原稿用紙に二十枚です。こ

れ位書ける学者が日本に何人いますか。せいぜい一ヶ月三十枚程度しかかけないでしょう。」

異様な話しに、私は帰る汽車賃と旅館の宿泊料だけは残しておかねばと、財布に気を配ったのは当然です。動揺した心を押さえるためにも、今度は私からきり出しました。K先生（B大学考古学）のことを話しましたが、一笑に付し話しにならないのです。

しばらく話がすすんだ頃、奥さんも居間に来られて、

「汽車の時間は、よいのですか」とおっしゃる。すかさず先生は、

「今度の発掘が始まって今まで、新聞に何回報道されているか知っていますか。一二〇回ですよ。」というや、すっと立ち上って、3号、4号の二冊のスクラップブックを持ってきて、説明するのです。

「西日本新聞だけでも原田大六氏連載で三十回です。こんなことがありますか。」

勿論この時からは顔を上げていたので、眼をじっとなかめて聞いていました。それはやはりひとかたならぬ眼差しの中に、静けさも感ぜられました。

こうして、発掘の本論は、なかなか話し出すチャンスが見つかりません。

そこで私は『まぼろしの邪馬台国』で有名な、盲目の宮崎康平氏が西日本新聞に書いたのを思い出しました。

「今度発掘調査している三雲地方は、弥生前期・中期・後期、それに古墳時代の遺跡が重なり合っている。二重地域だから、伊都国の文化の推移が解明できるだろう。それに邪馬台国畿内説は、鏡の発生が九州より古いということ、分布がより密であるというが大きなよりどころとしているわけだから、伊都国発掘でこれを打ち破るような、より古い鏡が出れば、あるいは〝九州説〟がさらに確実になるのだが……。」というのです。

そのことを私がきり出しますと、

「あの前に何があかりますか。あれは私が有名になったのに影響されて始めたのです。

大体邪馬台国が畿内説や九州説を論争しているのは、馬鹿げたことですよ。先日も松本清張がそこにすわって対談したのですが、おろおろして——。何も分っちゃいない。」

「時に先生は、万葉集についてのご研究も相当のもののようですが、それと考古学の関係はどうあるのか、また考古学でお忙しい身で、どれ位で読めるようになられるのですか。」

「三か月です。まず日本の古代の言葉から究明しなくては——。」

「古代からの言語については、学習院大学の大野晋教授は、大変深い方ではありませんか。この方のも参考になされるのですか。」

「だめだなあ、大体本居宣長と賀茂真淵、それに僧契冲がだめなんです。日本の国学者が、ずいぶん嘘を言っている。」本居宣長を罵倒したのにはあまりに驚いたので、

「あの本居宣長がですか。」と重ねて念を押しました。

「では先生は、民俗学の立場から論究はされませんでしたか」

「いや、戦後一番先に手がけたのがそれです。しかしこれほど馬鹿らしいものはないと思って、考古学の道に入ったのです。」

「そうですか。でも和歌森太郎博士は、随分書物も書かれているし、民俗学に深い方ですから、ご参考になったでしょう。」

「だめです。」

「そうですか。しかし何というても柳田国男の民俗学の世界は、時がたつにつれて深く認識され、日本民俗学の草分けですからねえ」

これにはさすがの大六大先生も悪口は出ません、何も述べませんでした。こんなに話が大きくなると、弥次馬根性が出てきたのを意識せずにはいられませんでした。

実は筆者私自身、今一番興味と関心を持っている哲学者に、京都芸術大学学長梅原猛がいますが、この人の歴史的発想は、法隆寺建立問題に見られるように、ユニークで学界の注目を浴びている第一人者ですので、この人ならばと思って、

「梅原猛の説は、先生のご研究の考古学の上にも、非常にご参考になるのではありませんか。」

「いや、梅原は私のにヒントを得ているのです。真似ですよ。彼は私を民間の大学者と言っていますよ」

この頃奥さんは別の部屋に居られる様子だったので、私も時間を気にしなくなりました。いくら遅くなっても日本の大学者を見下している大六先生ご自身、身ぶり手ぶりで悦に入ってまくしたてるのですから、時間の問題はもう私に責任がないのが分ったからです。

「私が本当にやっているのは何と思いますか。哲学ですよ。それから日本人の起原の問題ですよ。邪馬台国がどこの、ここのということより、それ以前の問題です。だから各新聞やテレビが私を追っかけるんです。私がこの日本人起原説を発表するのに、どれ位批難と圧迫と強迫があったかということは分りますまい。私は唯物論的進歩学者の方です。それに二体、日本の何政党が私の発表を阻止していますか、それが共産党ですよ。しかし二十数年たった今日のことですから、今度は世に出しますよ。ちょうど牧野富太郎が、学界から冷笑され、無視され、圧迫を受けたのと同じです。私には何の賞がくるか分りますか。」（私は文化勲章ではなかろうかという予感がした）

ふと時計をみると十一時を過ぎているので、旅館の人にも迷惑をかけてはと浮き足になったが、話の口調は益々強くなるばかりでした。私は機を見て、この度の発掘の成果を聞いて、しめくくりにしようとしました。

「いや、今始まったばかりだから、これからですよ。」

と言ったきりでした。

大六先生の口から「おほめの言葉」のあったのは、先生の恩師中山平次郎元九大教授と、牧野富太郎博士だけでした。また先生の学問の根底が哲学にあって、考古学や言語学の面から、日本人の起原を追求していること。しかも政治の世界や学界の、長い長い圧迫に堪えて、今度こそはと勇気を振るって、その成果を公けにするということが、四時間にわたる話の中でつかむことができました。

原田先生の後世に残る名著が、遠からず見られる日を期待して、私は庭に降りました。奥さんは離れにある書斎におられたので、遠い所からお礼の言葉を述べて辞しましたが、私の声は深夜の樹々に囲まれた収蔵庫に木霊して聞こえてくるようでした。

以上のことでお分りと思いますが、原田大六先生にお会いはしたが、発掘の詳しいことを皆様にお伝えすることは出来ませんでした。しかし古代伊都国の遺跡と出土品は、無言のまま私達の訪問を待ってくれていることでしょう。現地に臨みさえすれば、興味のつきないものがあることを信じて疑いません。

これで「前原町の古墳発掘」の報告第二信を終ります。

（以上）